

日本精神障害者リハビリテーション学会
第29回 群馬オンライン大会

地域共生社会を創る



「できるを増やす」から

会期 2022年 12月 10日(土) ~ 11日(日)

会場 オンライン開催・オンデマンド配信 (Zoomウェビナー)

会員	事前申込:6,000円／当日:7,000円
非会員	事前申込:7,000円／当日:8,000円
家族・当事者・学生	事前申込:3,000円／当日:4,000円

研修セミナー参加費(各セミナーにつき)	
会員	事前申込:2,000円／当日:3,000円
非会員	事前申込:3,000円／当日:4,000円
家族・当事者・学生	事前申込:3,000円／当日:4,000円

大会長 浅見 隆康
(群馬大学健康支援総合センター)

副大会長 後藤 雅博
(こころのクリニック ウィズ)

実行委員長 須藤 友博
(群馬県立精神医療センター)



《大会事務局》

日本精神障害者リハビリテーション学会群馬オンライン大会 運営事務局
〒371-0805 群馬県前橋市南町2-65-1 株式会社クラール内 TEL:027-260-9525 FAX:027-260-9322 E-mail:japr29@g-regi.jp

特別講演 萩原朔美先生（前橋文学館館長 多摩美大名誉教授）

演題：表現行為だけが私を超える

概要：自分の体験を振り返ると、行為の根底に私とは何者かと言う問いがある。演劇体験も、美術の作成も、映像作品製作、あるいは文章表現も答えを探すための手段であったようだ。表現は自分を拡張させるのではないかと思っていたのだ。ところが、表現されたものが作家を離反する事を体験すると、実は表現は自分を消し去る事だと言うことが分る。そんな表現と精神の関係について話してみたい。

教育講演 池淵恵美先生（帝京平成大学 心理学科教授）

演題：大人の自閉症スペクトラム障害の人への支援

概要：自閉症スペクトラム障害の人たちは小さいころから生きづらさを抱えていて、それが障害によるものとは気づかれずに、悪戦苦闘していることが多い。しかし周囲の無理解でいじめなどにあって、屈曲してしまわなければ、成長する力はしっかりと持っており、何より周囲が得意なことに気づいて引き出す環境を用意することが一番の支援になる。当日は自閉症スペクトラム障害の人たちの脳の仕組みで苦手なことが出てくることを説明した後で、良い上司に巡り合って元気に働いている人たちの話をしたい。

大会長講演 浅見隆康先生（群馬大学健康支援総合センター）

演題：メンタルプラスの時代を拓く

概要：大変な状況下でも自身のストレングスに気づくことができれば、そのことが動機づけとなり困難な中を歩むことができる。私たちには、「気づく支援」が求められている。「できるを増やす」という視点は、自身のできているところに目を向け、「ストレングスに気づく」こととなる。できることが増え、可能予期（バンデュラ）が強まり、社会生活を円滑に営めるようになる。

研修セミナー1 植田俊幸先生（鳥取県厚生病院・精神保健福祉センター）他
テーマ：退院できない理由を探すのはもうやめよう～長期在院者の退院支援の政策と課題

概要：地域移行・定着支援やアウトリーチといった、退院支援や在宅支援の仕組みがあるにもかかわらず、病棟では問題ないのに長期入院している人や、症状が強く入院を続けるしかないと思えてしまう人がいます。「本当に退院支援を進めても大丈夫なのか」と職員が心配して、支援が進まない状況に直面することもあります。本セミナーでは、職員との信頼関係が成立せず、単独の散歩さえ許可されていなかった方が、地域生活を実現するまでの過程を、主治医と本人それぞれの立場から紹介いたします。参加者がズームのブレイクアウトルームに分かれて感想や意見を話し合う時間も設けており、退院支援に関する気づきを深めるセミナーとなっています。

研修セミナー2 門屋充郎先生（十勝障がい者支援センター）
テーマ：精神障害をもつ人の地域生活支援の創り方～できるを増やすと精神科医療の役割は変化する～

概要： 1970年秋、3精神病院の複数の精神科医とPSWは『社会精神医学』の抄読会を開いた。そこから実践理念を共有。その後精神科医とPSWは地域訪問支援を20年以上実施、事例ごとに本人の望む生活支援とそれぞれの役割を確認しながら『人』中心の生活支援を展開した。一般社会資源の活用と精神保健福祉医療、官民協働等の創意工夫は完結型診療圏域の6精神科病院1,012床は4精神科病院376床4クリニックとなった。理念の共有と生活支援中心の展開方法を振り返る。

研修セミナー3 坂本明子先生（久留米大学）他
テーマ：リカバリーカレッジを共に創造する

概要：リカバリーカレッジは、精神保健サービスのリカバリー志向への変革としてイギリスで誕生しました。その特徴は、教育的アプローチで個人のリカバリーに役立つ講座を開講していること、専門職と精神疾患の経験者がコ・プロダクションで、運営、企画、実践していることなどです。今回は、フィデリティ（忠実度）を含めたリカバリーカレッジの概要および各地のリカバリーカレッジの実践をピアソーターと共にご紹介します。

<大会シンポジウム> 12月10日 10:20~12:20

テーマ：何が障壁なのか、バリアを乗り超えるために一群馬における挑戦

シンポジスト：

小川悦子氏 旧東村役場 保健師、現明清会在職

藤平和吉氏 群馬大学医学部精神科

山本 大氏 藤岡ダルク

高槻健二氏 土曜学校

村松正樹氏 群馬県立精神医療センター

概要：「何が障壁なのか、バリアを乗り超えるために一群馬における挑戦」をテーマに、行政、若者支援、ピア先駆者、家族、医療関係者など、それぞれの場における活動を振り返り、障壁をいかに乗り越えてきたか、より良い地域社会を創る上で求められることは何か、などについて語り合う。学会は来年で設立30年となり、スローガンも「共に創る、共に暮らす」に変更された。私たちが目指してきたことは何だったか、それはどこまで実現できたか、今後何を成すべく、それを成すためにどのようなことに取り組んでいくかを話し合う。

<学会シンポジウム> 12月10日 15:30~17:30

テーマ：パンデミックと精神医療・精神科リハビリテーション；3年の経験から
育んだもの

シンポジスト：

加瀬昭彦氏（横浜舞岡病院） 精神科病院での診療

鈴木一広氏（NPO法人おれんじはあと グループホームなんがい）福祉施設

佐藤史教氏（岩手県立大学）オンラインを活かしたリハビリテーションプロ
グラム（SST）

渡邊真理子氏（ちはや ACT クリニック）アウトリーチ（ACT）

指定討論：川村有紀氏（仙台スピーカーズビューロー）

概要：精神障害者リハビリテーションに関わる者たちが、新型コロナ禍の中、それぞれの立場や状況において、どのように立ち向かってきたかを検証し、精神障害者への支援や保健・医療・福祉サービスの質を維持するために行ってきた工夫などについて紹介し合い、これらの経験を下に、今後の精神障害リハビリテーション活動の方向を話し合いたい。

ミニレク

ミニレク1（12月10日）

テーマ：脳機能からリハビリを探る
講師：田川みなみ氏（群馬県立精神医療センター）

内容：

脳画像研究も脱施設化する時期ではないでしょうか。特殊な機械や解析が必要なこと、研究結果がすぐに臨床に反映されにくいこと、研究内容の理解には多量の専門用語の知識が必要なことなどが、脳画像研究の敷居を高くしているように思います。自身も、研究結果の臨床への還元が、すぐには実現し難いことを心苦しく感じています。脳画像研究が象牙の塔から地域社会へ移行していくには何が必要か、自戒を込めて考えてみたいと思います。

ミニレク2（12月11日）

テーマ：AYA世代のこころの不調に寄り添う
講師：白井 香氏（東京大学大学院医学系研究科精神医学教室）

内容：

近年、若い世代のこころの不調への支援の在り方に注目が集まっています。この時期は、「思春期危機」の言葉が知られるよう、こころのバランスを崩すことなくありません。将来の自分に思いを巡らせる中で、不調からの回復に見通しを持ちづらいことや、他者へ相談することにまだ慣れていないことも特徴です。個別性の高い、多感なAYA世代のこころの不調に寄り添う取り組みについて、演者らがAYA世代のこころの不調に向けて開発した心理プログラムも例に紹介しながら、皆さまと考えたいと思います。

心理教育・家族教室ネットワークシンポジウム（12月11日）

テーマ：これから心理教育の効果的な実践について考える—エビデンスからの示唆をふまえて—

シンポジスト：

香月富士日氏（名古屋市立大学） うつ病の家族心理教育：実践報告とエビデンス

上原 徹氏（高崎健康福祉大学） 摂食障害の家族心理教育

西内 絵里沙氏（国立精神・神経医療研究センター所沢市アウトリーチ支援チーム） アウトリーチ支援における家族心理教育の活用

福井里江氏（東京学芸大学） 共同意思決定（Shared Decision Making: SDM）と心理教育